

「モダンガール」再考

——雑誌『女性』を通して——

吉武 英莉
(玉井研究会 4年)

序 論

- I 「モダンガール」前史
- II 雑誌『女性』の沿革
- III モダンガールの諸相とその変容
 - 1 モガ登場の社会的背景
 - 2 結婚と貞操について
 - 3 モダンガールのイメージ

最後に

序 論

本稿が考察の対象とする『女性』は、大正11年から昭和3年まで、化粧品メーカーが出版していた女性向け雑誌であった。女性問題だけでなく、広く社会問題や政治経済についての記述も多いため、比較的知識層向けの雑誌であったと推測される。

同誌が発刊された大正から昭和初頭は、社会や人々の生活に大きな変化を見ることができた時代であった。第一次世界大戦に伴い、日本では急速に産業化が進み、サラリーマンという新しい働き方が誕生し、電力や鉄道なども発展し、大衆の生活の近代化が大きく前進した。デパートメントストアやカフェー、レストラン、洋食、活動写真、ラジオなどの現代にまでその姿を残すような文化も花開いた。また思想面では、自由主義・民主主義の風潮が高揚した。所謂大正デモクラ

シーの時代である。この大正デモクラシーには、女性解放の流れも含まれており、美容師、事務員、タイピスト、パスガイド、店員、電話交換手など女性が働く場も新たに生まれた。そうした流れの中で新たに登場したのが、「モダンガール」である。束髪や和装が一般的であった大正時代において、洋装の彼女たちは好奇の眼差しを浴びながらも、時代の最先端をいく存在と見なされていた。新聞、雑誌、小説などのメディアでも数多く登場し、大正から昭和初頭の時代を代表する文化像、女性像となった。

雑誌『女性』は、かかる「モダンガール」の名付け親である北澤秀一が、この言葉を広めるきっかけとなった評論「モダン・ガール」を寄稿した雑誌として知られている¹⁾。したがって、本稿は、この雑誌に注目し、その内容の考察を通じ同時代の人々が、「モダンガール」にいかなるイメージを抱いていたのか、いかなる意味を見出し、位置づけをしていたのか、他の類似の言葉との比較や、上記イメージの変容をも含め明らかにすることを目的とする。

I 「モダンガール」前史

モダンガールは過去から現在に至るまで否定的なイメージを持たれがちである。当時は「エロ・グロ・ナンセンス」が流行語であったことから分かるようにエロチシズムや、資本主義が浸透した結果の消費欲への関心が話題となり、それらとの関連から彼女らはしばしば批判の対象にさらされた。小林きよしの漫画「モガさんの持物」²⁾は当時抱かれていたイメージの典型例と捉えることができる。そこで表現されているモガは、体の線があらわになった薄い洋服を身に着け、短いスカートをはいて足を出し、派手な化粧品に避妊具、偽名刺、精力剤、質札などを持ち歩き、街を歩く姿である³⁾。

確かにモダンガールという言葉を目にした際、現在もこのイメージを持たれがちである。当時、モダンガールをもじり、発声音にあわせて当て字をした「毛断害有」という文献が存在していた⁴⁾ことを考えるとその悪評が推し量られる。また現在、広辞苑第7版のモダンガールの説明を見てみると、「当世風の女性。昭和初期、多くは軽蔑の意をこめて用いた。」と記されている。過去も現在もモダンガールは批判の対象であり続けていることがよく分かる。しかし、その一方でモダンガールが街中に溢れていたわけではない。昭和3年3月号の『女性』では、田舎から上京してきた友人がモガを見たがるが、想像するようなモガには結局出

会えなかったことが記述されている。

図 1

去年、このモダンガールの騒ぎの全盛時代頃に、僕の田舎の友人は久し振りに上京して来て、『モダン・ガールといふものを見せてくれ』とせがんだ。兎に角、本場だといふ銀座へ行行って見て、その更に本場だといはれてゐる喫茶店へも一二軒行行って見たが、小説や雑誌できまってる型をしたのには一人も会えなかった。そして彼は非常な失望をして帰った。今でも銀座の四角に立って、そのおどりの外形だけでもモダンな女が何人通るか気をつけて見るが、恐らく千人の通行人中に一人は居まい⁵⁾。



また雑誌『女性』には、長崎と大阪のデパートの前に立って、女性の髪型がどのようなものかを調査した結果が掲載されている。これを見てみると、日本髪5割、束髪3割、新式が1割という結果であった⁶⁾。髪型だけをとりても、大部分は明治やそれ以前から親しまれている髪型をしており、断髪や耳隠しといった、モダンガールを表すような髪型をしている女性は減多に存在しなかった。

ここから分かることは、「モダンガール」は地方から見物に来るほど、都市の最先端の流行であったということである。人口に対してその人数が少ないにもかかわらず、これほどまでに固定的なイメージが流布していることは、当時の人々に最も深く関わるメディアがモダンガール像を作るうえで大きく機能していたことを窺うことができる。

青木淳子氏によると、そもそもこのモダンガールという言葉がはじめて登場したのは読売新聞紙上においてであった⁷⁾。大正12年1月7日から14日までにかけて「滞英雑記」という題名で、イギリスに留学している兄が日本にいる妹に向けて手紙を書くという設定の連載記事である。この記事の作者は長梧子とあるが、当時読売新聞社の記者であった北澤秀一のことである⁸⁾。この「滞英雑記」⁹⁾の中で、北澤はモダンガールの特徴を、「モダン・ガールは好きなことはするけれど、嫌ひなことはしない。それが彼等の特徴である。』¹⁰⁾と一言で表している。この表現に対して、勝手気ままな生活をするモダンガールは獣のようだという反論が

来ることを想定したうえで、「自分の個性を尊重すると共に他の個性も尊重」することが、「教養のない下等な女のぶしつけな表現」とは違う点であり、これらを「一緒にしてはいけない」と、忠告している。また、伝統や慣習に縛られることがない、「生き生きとした美しさを持つ」女であるとも、説明している。なぜここで彼が、モダンガールを生き生きとした表情を持つと表現しているかという点、当時の女性は喜怒哀楽を表に出さないことが徹底されていたことに由来する。儒教や仏教がもつ消極道徳が日本人の精神に根差したことで、何事も内輪に、謙遜することを善しとするようになってしまった。その結果、当時の女性は、表情を表に出さないことが多かった。その慣習が根付いた環境下にありながら、それに縛られないモダンガールは、感情を表に出し、のびのびとしている為に常にその顔は微笑んでおり、「笑ってゐる者は沈んでゐる者より美しい」と解説されている。

「モダンガール」という言葉自体が生まれたのは、大正12年の北澤が執筆した前出の「滯英雑記」であるが、モダンガールと定義されるであろう女性は、それ以前から存在していた。すなわち、明治時代初期に、アメリカなどと締結した不平等条約を撤廃させるため、明治政府は、欧化政策に乗り出した。その一環であった鹿鳴館は、当時のヨーロッパ諸国の流行を体現し、文明開化を象徴する存在で、海外からの来賓をもてなすための社交場であった。高貴な人間が集められた一方で、実際はダンスの訓練を受けた芸妓が人数あわせで駆り出され続けていた。「藝妓謳歌時代は明治末期まで命脈を保った」¹¹⁾と表現されたように、これらの女性に欧州文化の享楽文化を垣間見ることができる点においてはモダンガールのルーツを見出すことができる。また「場末の藝者が警察に駆け込んでモダンガールに鞍替えしたいと言い出した」¹²⁾という表現もあることから、芸者たちもモダンガールを同類とみなしていたといえる。更に、「鹿鳴館時代の如きは、當時のモダンボーイ、モダンガールの絶頂時であつたのだろう」¹³⁾と鈴木文史朗も記していることから、洋装など西欧の新しいものを吸収することが「モダン」だとする考え方においては、鹿鳴館時代にモダンガールのルーツがあったとも言えよう。

II 雑誌『女性』の沿革

『女性』誌上においてモダンガールと呼ばれるであろう存在が登場したのはい

つであろうか。創刊号に掲載された「女人國記」では「近頃の流行は奇形オペラバックに洋装、断髪、離縁状に俳句、活動女優に歌劇女優である。」¹⁴⁾としている。ここで羅列されている単語は、どれもモダンガールの特徴ともいえるものであることから、後世から考えると、外的要素のみを備えるモダンガールは大正11年前後には存在していた。また、洋装や断髪といった女学生の服装や髪型が変化していく様子を見た人は「端正、謹厳な感じといふよりは、魅惑的とか蠱惑的といった方が何よりふさはしいように思える」¹⁵⁾と表現している。和装に比べて体の線を強調する洋装姿は、性的な視線を投げ掛けられやすかったといえる。

雑誌『女性』は、大阪の中山太一が率いる「クラブ化粧品」の中山太陽堂（現クラブコスメチック）傘下にあった出版社である「プラトン社」が、大正11年5月から1928年3月（4月号）まで合計72冊を発行した文芸雑誌である。発行人は松阪青溪、編集長は小山内薫である。主な執筆者は、谷崎潤一郎、平塚雷鳥などの時代を代表する文筆家であった。女性に関する評論を書いた者は、石井満、奥むめお、下田将美、土田杏林、三宅やすこ、長谷川如是閑、平塚らいちよう、三宅やすこ、山田わか、山田邦子、和田富子などの面々である¹⁶⁾。執筆者にはジャーナリストが多く、山川菊枝、平林初之輔などの社会主義者として名をはせた人物も度々登場しており、言論の多様性を取ろうとする編集側の意図を看取できる。『女性』が創刊された大正11年は、断髪が流行すると共に、資生堂に美容科、美顔科、洋裁科が設置され¹⁷⁾、文化裁縫学院（のちの文化服装学院）が誕生した年¹⁸⁾でもある。翌12年には当時完成したばかりの丸の内ビルディングに山野千枝子が美容院を開店している。次第に洋装が一般化してくる時代であり、ドレスメーカー女子文化学院などが数多く開かれ¹⁹⁾、女性の風俗が大きな転換期にあった時代に創刊された雑誌であった。

さらに『女性』の表紙やそのロゴ²⁰⁾、扉絵等のビジュアル面も当時人気を集め、同誌のロゴを作成した山名文夫はこれをきっかけに注目されるようになり、のちに資生堂の広告、ロゴマークで大成する²¹⁾。またこのロゴは、一世を風靡し、無性音楽や看板ののぼり旗に多用される人気の書体となった。

『女性』創刊の巻頭は「The Age Of the Woman（二十世紀は婦人の世紀）」と書かれているだけで、特に創刊の辞はない。したがって、創刊の意図は定かではないが、当時は世界規模で女性に目をが向けられ、大正6年には『主婦の友』が²²⁾、大正12年には『令女界』が創刊される²³⁾など、数々の女性雑誌が発刊され、『女性』もその一翼を担うことになる。発行部数は不明であるが、かなり知名度が高

図2



かった雑誌であった。東京市社会局による『職業婦人に関する調査』²⁴⁾によれば『女性』は『婦人倶楽部』と並んで、職業婦人が購読している雑誌の6位に上がっていた。また、『女性』を評価した岡山県児島郡のある教師は「卑猥ではないが性、恋を多く取り扱ってあるやうだが、新知識を得るにはいいだろう」²⁵⁾と述べており、雑誌が比較的容易に手に入る都市部だけではなく、農村部でもかなり普及していたことが分かる。

『女性』の大きな特徴は、1920年代が労働問題、農民問題、水平問題が議論された特有の時代であったにもかかわらず、紙面上で取り上げられることが少なかった点である。これらの問題には、男性だけではなく、多くの女性が参加し、日本労働組合評議会婦人部、日本農民組合婦人部、婦人水平社など結成されていた。また廃娼運動についても長い時間をかけて議論されていたにもかかわらず、同誌で議論されることが少ないことから、読者は、ある一定以上の知識層ではあるものの、社会問題ではなく流行に敏感な女性と、かなり限定的であったといえる。また、女性に関する問題を取り扱う記事も多様ではあるものの、表層的で画一的であり、むしろ同時代に流行しているもの、新しく生まれた風俗や生態、モダンなどの実態を明らかにすることに主軸をおいていた。

『女性』の特徴の二つ目は、内容の変化があったことである。創刊から大正12年9月に発生した関東大震災までは、女性の生き方、女性全体が抱えている問題に関する評論が毎月必ず数本書かれていた。「現代女性の諸相」²⁶⁾や「生活難失業難と貞操問題」²⁷⁾と、当時問題視されていたことを題材として特集が組まれることも多かった。しかし、関東大震災後、文学雑誌としての一面がより強く出てくることになる。小説に割かれるページが増えた²⁸⁾ことに加え、その当時流行っていた劇や芝居の台本、それらへの評論記事が掲載されることが圧倒的に増えた。また、それらの劇や芝居に登場する女優の写真などに多くのページが割かれることになる。昭和に入ると、また女性問題に関わる記事が増え始める。結婚、女学生の過ごし方、性的な問題に至るまで幅広く議論されていた。さらに特徴的であったのは、昭和に入ってから初めて登場した読者投稿欄である。掲載された記事に対する意見や、生活の知恵に関するコメントなど多岐にわたっている。廃刊

になる前年には、流行の水着や帽子のかぶり方、子供服の選び方などが掲載されており、方向性を模索していたことがうかがえる。

『女性』の主な広告出稿主からも、読者層を推測することができる。最も多いのは、三越、大丸、松阪屋などの百貨店であり、巻頭3、4ページを独占していた。そのほかは、薬品やキッコーマンの醤油などの家庭用品などが大部分を占めている。他に特徴的なのは、大正11年から大正15年まで継続して掲載された『赤い鳥』の広告である。また、大正14年からは広告社数が増加し、名古屋新聞、北海タイムズなどの地方新聞の広告も掲載されている。しかし昭和2年頃になると、編集本部が大阪から東京に移転したこともあり、広告の種類が分散、小型化していったこと、自社の化粧品や、子供服メーカーの紹介、避妊具の宣伝、姉妹雑誌である『苦楽』の紹介ばかりが広告欄を占めるようになる。自社製品を紹介する広告の増加は、他会社や団体から広告をとることができなくなった結果で財政的には苦しかったと推断できる。同誌が昭和3年3月でもって廃刊となったことはそれを裏付けていた。従来朝日新聞、東京日日新聞などで大々的に宣伝されていたが、新聞には、5月号の広告が出ているにもかかわらず出版されておらず廃刊の辞やそのいきさつについても書かれていない。直前まで出版しようとする意図は存在していたが、存続できない状況に追い込まれたことが想像できる。

Ⅲ モダンガールの諸相とその変容

1 モガ登場の社会的背景

モダンガールが登場した際の社会的背景として、『女性』は個人主義の萌芽と近代化を挙げている。そもそも女性は男子同様の権利や自由があることを教えられてこなかった。女性は、三従という言葉があるように、男に従うことが当然のこととされた。家族制度に都合の良い良妻賢母主義の教育を受けたが、未だかつて人としての教育を受けたことがなかったのであった。しかし、19世紀に入り個人主義が生まれ、第一次世界大戦でこれが世界全体に広まり、モダンガールの種がまかれた²⁹⁾。個人主義の芽生えは、従来の道徳観を解放するものであった。千葉亀雄は「融通のきかない道徳観念が、単に社会統制の上だけに、あつさり適用されていたならまだ我慢もされよう。その領分を平気で乗り越して、個人の自由や、人格の尊厳さでも、平等一様に取り締まろうとするのだからたまらないのである。〔中略〕それがひっくり返った時代が来たのだから、そうした道徳が片っ

端から解體して来るのはどうしようも得ない。〔中略〕モダン・ガアルやモダン・ボイは、さしあたり、この先端に立っているものである。』³⁰⁾と述べ人類の独立が呼び覚まされた時、人間の本性を縛る道徳が解体され、自らの意思に従って生きるモダンガールが誕生したと考えていた。清沢冽も、歯向かわないことが当たり前であった女性が、個人主義の芽生えにより、男性に反発するようになった姿がモダンガールであり、その存在は男性にとってインパクトが強かったため、世間や論壇で大きく取り上げられたに過ぎないと考えていた³¹⁾。

二つ目の背景は近代化である。後述するようにモダンガールと混同されがちであった「職業婦人の發生は決して、一の偶然事ではない。それは近代文明の奥深くに根差して居るのである」³²⁾とあるように、世界規模で女性の社会進出をすすめる、結果的にモダンガールを多く生み出した要因として、第一次世界大戦とそれに伴う近代化が指摘されていた。「文明の進歩は、こゝに産業革命をもたらした。大規模の機械的生産方式は、勃然として発展した」³³⁾とあるように産業や機械化が大きく発展したことは、日本もその例外ではなく、ガス、電気、水道は家庭内にまで入り込み、「婦人の家庭的努力を省いた」³⁴⁾。その結果、従来家庭内で女性がすべきとされた仕事を、わざわざ女性が手間暇かけてやらずとも、機械で簡単にできるようになった。具体的な例を挙げれば、機を織るとか、味噌をつくるなどの作業である³⁵⁾。従来家庭内でしていた仕事が軽減され、社会への進出を促したのである。女性は社会に出て働くことで、賃金を得、多少なりとも経済的な独立を果たすことができるようになったのである。

2 結婚と貞操について

モダンガールの重要な要素に、従来の結婚とは真反対ともいえる自由恋愛が挙げられるが、これを『女性』ではどのように評価していたかについて論じたい。

モダンガールが世間に現れる前、広く受け入れられていた理想とする女性像に「良妻賢母」がある。この「良妻賢母」思想が国家公認の理念としての地位を確立したのは、明治34年に高等女学校令施行規則が發布され、その翌年に行われた文部大臣菊池大麓の演説と言われている。そこにおいて彼は「結婚して良妻賢母になると云ふことが将来大多数の仕事である」と述べたという³⁶⁾。この演説をきっかけにして、全国的に「良妻賢母」教育が定番化されるようになる。「忠臣二君に仕へず、貞女両夫に見えず」という貞婦烈女が理想的女性像に掲げられ、特に中流以上の階級の女性に対して強く教え込まれるようになっていったのであ

る³⁷⁾。そのような子女教育に付随するものが、結婚の自由がない女性の存在である。彼女等は、親によって決められた結婚をするため、結婚を「富くじ」のようだと表現していた³⁸⁾。しかし、『女性』誌上では、この結婚に疑問を呈する意見が多く見出されることになる。

例えば舟橋確は「戀愛観を含めて結婚観程近年変化したものはない³⁹⁾」とあることから、結婚観に対して大きな変化が生まれつつあることが認識されていた。同じ時期に、舟橋以外に結婚観に関して言及していたのは馬場孤蝶である。彼は当時の結婚を不自然と考える立場をとり、結婚が強制的なものであると、指摘している。また同時に、身分不釣り合いの結婚をした場合、男が女を捨てると褒められ、捨てられた女は「身から出た錆」と称されるのはおかしいのではないかと疑問を投げかける⁴⁰⁾。藤井健治郎は「国または社会的道徳が結婚を強いるようなことがあれば、それは個人の自由を侵害している。」⁴¹⁾と言い、結婚を完全に私事として取り扱うべきだと主張する。先述した馬場や藤井の記事はいずれも従来の結婚観への不満を主張するものであるが、「自由」に絡んで論じられている点が共通している。第一次世界大戦終結後、ヨーロッパ各地では女性が戦時中に男性に代わって勤労を行ったことにより、女性の独立を推進する動きや、婦人参政権など、女性の権利拡大を訴える運動が進んだ。今まで虐げられてきた女性が、生活や結婚などをめぐり被ってきた不利益を挽回しようとする動きである。その流れに乗じて、結婚相手を自由に選択すること、または離婚することを促す主張が日本でも見られるようになったといえる。

結婚以上に『女性』誌上で論及されたのは、貞操についてである。一夫多妻制という言葉や「貞操とは男の爲の道徳である。男の自由の為に、女を拘束するところの道徳である。」⁴²⁾に象徴されるように、女に対してのみ純潔を求めるのが当時、一般的であった。しかし、ここにも「自由」を求める声があがり、男性に対しても女性同様不貞操を罰しようとする動きが生まれた⁴³⁾。実際、大分県大野郡大野村和田すみとその夫（熊夫）に対して横山大審院長が「夫にも貞操の義務がある」という判決をくだして以降⁴⁴⁾は、夫の不貞操を理由にした離婚が増加した⁴⁵⁾。夫の貞操問題に関する特集が組まれた号の編集後記に「一般男子にも貞操の観念責任をはっきり持つてもらいたいと思って問題にしたのです。」⁴⁶⁾とある。男に貞操を求める考えがいかに新鮮であったか、を物語っていた。また貞操問題からモダンガールが生まれたと考える者も存在した。「弱き者は良き嫁、良き子、良き妻として自らの心をあざむき、忍従の仮面を被ったもので、強き者は

反逆児となり、更に奇形なるものは所謂モダン・ガール型のものとして反動の生活に生きようとする。』⁴⁷⁾との一文からは、従来の在り方に反発し自由を求める女性の姿を歓迎しつつも、モダンガールは、その「奇形」と表現していることから、行き過ぎた負のイメージとして認識されていたことを示していた。

3 モダンガールのイメージ

(1) 北澤による定義

「モダンガール」の名付け親については、昭和3年1月号の『文藝春秋』で久米正雄が「名付け親は、この間死んだ北澤秀一だ。』⁴⁸⁾と発言している。その一方で、大宅壮一の「百パーセント・モガ」によると、モダンガールという言葉を生み出したのは、新居格であると指摘していた⁴⁹⁾。しかし、その新居は大正14年5月の『婦人の国』掲載の「近代的女性批判」で、北澤がモダンガールという言葉を生み出した、と述べていることから、新居がモダンガールの名付け親とする大宅の見解は誤りであったことが分かる⁵⁰⁾。従って大正12年に、北澤秀一がモダンガールという言葉をもとに日本に登場させたと言えよう。

北澤秀一は、既述のように「滯英雑記」の中でモダンガールについて言及したのち、「モダン・ガール」という題名の評論を『女性』に寄稿している⁵¹⁾。ここにおいて、彼はモダンガールを「近代的な女」とし英語をそのまま日本語に直訳するだけで、外見には言及していない。北澤は、後のモダンガール論者や小説などで描かれるモダンガール像とは大きく異なり、服装や髪型といった外的な要因を考慮に入れていなかった。

北澤が考えるモダンガールの二つ目の特徴は、近代性を有するなら既婚女性をも含むすべての女性を指している点である。モダンガールは未婚女性とされることが多かったが、既婚女性も含むと明記していることが注目される。そして、職業についているか否かは問わないが、一般大衆から出てくるモダンガールの大部分は何かしらの手段によって経済的に自立していると解説していた。

このように北澤はモダンガールに肯定的評価を下す一方で、「モダン・ガールがゆかしさを失って、表現的になつた半面には、〔中略〕浅い奥行を暴露してゐる醜さはあるかも知れぬ。』⁵²⁾と、モダンガールが世間から否定評価を受けている現実を窺わせていた。世間が、教養をもたない階級の中に、モダンガールに似たような存在を見つけ出すであろうことを予測しつつ、これがモダンガールの本質であると認知してはいけないと注意を促している。北澤は、モダンガールに

問題があるのではなく、従来男が占めていた役割を彼女らが担おうとすることに反発心を抱く社会そのものに問題の原因があるのだと考えていた。そしてこの問題を解決するには、「近代文明の生活に与へる機械的便利」（北澤はこれをモダンコンビニエンスと言い直している）が社会に浸透することが必要と考えていた。それにより、家庭から解放された女性が経済的にも独立を果たし、精神的にも自立した真のモダンガールが誕生するであろう、と展望していた。

（２） 職業婦人との対比

モダンガールについて考える際、同時期に出現した職業婦人の存在を無視することができない。以下では、『女性』誌上におけるモダンガールと職業婦人との対比について考察してみたい。

まず多く見られたのが、モダンガールと職業婦人を混同する考え方である。例えば、「職業婦人の廿四時」⁵³⁾では、当時職業婦人として社会で働いていた女性十数名の一日の生活に密着し、それぞれの生活について取材している。家庭と両立し、実家の毛糸屋を朝から夜遅くまで営み、そのうえ母としての役割をもこなす婦人から、遅くに出社しお菓子の時間を持ち、帰宅後も好きなことをして生きる丸ビルの店員までを、職業婦人として紹介している。毛糸屋を営む前者は、職業婦人と敬称することができるといえるだろうが、後者の好きなことのみをし、自由気ままに生活する姿は比較的、モダンガールに近い存在であったのではないかと考えることができる。職業についてさえいれば、職の中身や他の時間の使い方や生活が問われることはなく、「職業婦人」と呼ばれていた⁵⁴⁾。モダンガールと職業婦人との間に明確な線引きがなされていなかったといえる。

また、「一と口に職業婦人といふ文字は何んとなく侮蔑的に聞こえ、また活字の上で見ても、何んとなく嘲笑的の眼差しを以て見るやうに思はれます。〔中略〕またこれも同じ特権の人で暗い火の下に日々と化粧をした人影を指さして職業婦人よとそでを引き合っていったります」⁵⁵⁾との一節からは、売春婦もある種の職業として捉えていたことが分かる。外で働くのは男性の役割であると考えられていた時代であるが故に、女性が職業につくことが異例であり、上流階級の人々は外で働く女性に侮蔑の眼差しを送っていたことが分かる。家庭で妻として働くことが当然であり、女性が外で働くことが異例であった時代だからこそ生まれる差別意識と言えた。先述した通り、近代化により、女性の社会進出が進み、車掌、看護師、教員、婦人記者などの職業婦人が登場する。しかし、女性が社会

に進出することより、男女が同じ空間の中で働くこととなり、当時はそれが異常と捉えられた。例えば、教育現場において、男子と女子の児童は別の空間で勉学にいそしむ、別学が当たり前であった。そのような慣習を逆転させたことで、男女峻別の前提が崩壊した。この影響を受けて、男女関係の風紀が乱れたとの解説が行われることになる⁵⁶⁾。

その一方で、両者を全くの別物とみなす考え方も存在していた。すなわち、職業婦人は一部の人間に限定され、頭脳労働的な仕事、教師、医者、弁護士、学者など、職業に於ける高度なスキルが求められていた。例えば、タイピストも、書類をタイプするだけが仕事ではなく、書類に間違いがあれば、それを指摘しなければならないし、海外とのやり取りがある企業では英語やドイツ語などの言語にも精通していなければならない。つまり、それだけの高い教養を付けることが求められた。このように頭脳労働をする職業婦人は高い教育水準の中にあり、女性全般のごくわずかに限定され民衆的ではなかった。

これに対し、モダンガールと称せられる女性は、知的教育が不十分な大衆層であった。後述するようにモダンガールと関連付けられやすいのは私娼公娼であるが⁵⁷⁾、北澤が「淫蕩の蛇もゐるであらう。〔中略〕現に教養を持たない階級の中に、私達はそれに似た者を時々見出す」⁵⁸⁾と述べているように、彼はこれもまたモダンガールの一つの形と考えていたことが分かる。他にも、銀ブラに象徴されるモダンガールを「打算的なわりに浪費的であり、娼婦的……」⁵⁹⁾とし、モダンガールの解釈の一つに女性の娼婦化を挙げる一節⁶⁰⁾があることから、当時の『女性』の中には「モダンガール＝娼婦」という考えが確かに存在していた。

モダンガールを娼婦と混同する考えを、娼婦の教育レベルを参考にしながら検証してみたい。公娼5152名にとった、教育に関するデータ⁶¹⁾によると、全く教育を受けたことがない者が818名、高等女学校1、2年まで在籍した者が18名、高等女学校3、4年まで在籍した者が13名、卒業することができた者が0名であった。この数字をみると、いかに娼婦として生きていた彼女らの、道徳などの学びも含めた教育が不十分であったかが理解できる⁶²⁾。また『女性』誌上でも生活に苦しむ女性が公娼私娼になる原因を無知さにあると結論づけている⁶³⁾。このように両者には教育レベルで大きな違いが存在していた。

二つ目は、他動的な能動的かの差異である。職業婦人や女権論者などは、何かしらの思想に突き動かされている⁶⁴⁾。何かしらの事柄があって、ある者は権利を主張するようになり、ある者は職業につくようになった。外的要因によって刺激

表1

職業婦人	知識教養あり	思想に触発 (他動的)	(服装に関する 言及なし)	婦人解放
モダンガール	知識教養なし	思想なし (自動的)	西洋風	自由恋愛

を受け行動が方向づけられている点は、彼女達が他動的な存在であるといえる。一方で、モダンガールは彼女等を導く存在がない為、ただ人間としてほしいままに万事を振舞っているのである⁶⁵⁾。先述した通り、モダンガールは好きなことをして嫌いなことはしない存在と見なされ、好きか嫌いかの判断基準が彼女らの中にある点、またその基準によって生活を営んでいる点において、能動的であると見なされていた⁶⁶⁾。

三つ目に服装の違いがある。職業婦人の服装に関する言及を見ることはなかったが、モダンガールに関して言えば、その服装が特徴的であったことは言うまでもない。清沢冽は、「島田に髪を結ってゐる娘を見て『あの方はモダン・ガールだネ』とはいわない。モダンの資格としては、せめて耳隠しか、オール・バックなるを要する。また長袖を着て、ポクリ、と歩いてゐる娘さんは、その品行がどうあらうとも、少なくともモダンではない。』⁶⁷⁾とモダンガールと洋装が直結していたことを窺わせていた。振り袖姿のモダンガールが存在しないように、洋装をしていないモダンガールは存在しないと当時世間は考えていた。

最後にそれぞれの存在が後世にどのような影響を与えると考えられていたかについて紹介してみたい。職業婦人は、男性同様の職につくことで、女性が社会でも働き一人間として生きていけることを知らしめた。これは女権論者や女性参政権を主張する者と似通っていた。一方で、モダンガールは「夫以外の男に對して戀愛を感じても、それがプラトニックであるならば、夫に對しては依然として貞婦であり続ける。』⁶⁸⁾と解説され弁じられたように、従来の概念に縛られることなく人を愛する自由恋愛を提示していた。長く日本の歴史に張り巡らされた、家の考えに歯向かう結婚をする女性像にも共通していた⁶⁹⁾。

表1は、両者の差異をまとめたものである。しかし、モダンガールについては、漠然としたイメージしか形成されていなかったため、必ずしも明確な区別がなされていたわけではない。モダンガールを代表する人物も、吾こそがモダンガールであると声を大にして言い出す人物もいなかったため、人々の妄想の内やメデイ

ア、小説や芝居の中でイメージされた像が独り歩きしていた。また、その漠然としたイメージが原因となってモダンガールに悪印象が容易に纏わりついたともいえる。

大観すると、当初はモダンガールと職業婦人が混同されて認識されていたが、時代を下ると共にモダンガールのイメージ像が書き手によって人為的に作られ明確化されると、職業婦人と峻別されていったといえよう。

(3) イメージの転落

これまでモダンガールのイメージの内実に検討を加えてきたが、かかるイメージを毀損させた要因の一つに関東大震災⁷⁰⁾があった。この地震は、大量のデマを生み深刻な社会問題とともに、男女の関係なく失業問題を生んだ。「大震火災は一朝にして數十萬の婦人から家庭を奪ひ、夫を奪ひ、私財を奪ひて生活の安定を失はせ、彼女等を餓ゑたる失業者の群れに追ひ込んだ。家事の切盛りより外に働くすべを知らぬ新しい失業婦人の群れは、たゞ惑ひ、ただ絶望するの外はない。かくて彼等は残さされたる唯一の道として、肉の切賣りに生きることを與儀なくされるのであります。』⁷¹⁾と山川菊枝が訴えたように、女性に関して言えば、関東大震災を契機に女性の売春数は上昇した。「飢渴に迫った少女が一椀の食を得た爲に處女としての誇りを捨てた」という記事を読んだ時、毎日の新聞広告欄に、特殊の職業婦人募集の広告を見るごとに、かかる反映を生ぜしめる状を嗟嘆しないでは居られない。かくして女性の貞操は生活のパンを得るために金銭と交換すべく提供されるのである。その才能の有無にかかはらず、女性であるが故に最も容易に提供せられる条件であるから、背に腹は代えられぬ主義の安価な諦めと自家辨明のもとに暗黒におちていくのである。』⁷²⁾とあるように、震災を挟んで身を売る売春婦の存在がある種の職業として認知されてしまったことが理解できる。そして、洋装姿がモダンらしいものであった当時、派手な洋装に身を包んだ売春婦が、同様に派手な服装をしたモダンガールと同じような存在と世間から認知され、批判されていったことが窺われる。両者共に当時は異端であった洋装をしていたことから、売春婦とモダンガールのイメージが結びつけられたと考えられる⁷³⁾。

一方、『女性』誌上では、洋装を派手な服と見なされ批判を浴びせられるモダンガールを擁護する論者もいた。例えば、新妻伊都子は、美しく着飾り、一目につくような服装をすればなぜモダンガールと呼ばれ、その生活まで脅かされるの

か、と反抗している。働いている女性が自分の稼ぎで消費や多少の娯楽による慰安を得ようとするのは当然のことであり、その中からいきすぎた娯楽に走る女性がでてきたとしても、女性だけを非難するのはお門違いであり、同時に、モダンガールを魅惑的とか蠱惑的という言葉で表現しているのは、その考えの背景に男性の存在があるからだ、と論難していた⁷⁴⁾。また、清沢冽も同様に、婦人だけが洋装をしたことで批判され、近頃の女性は不埒だと言われるのは、今まで見慣れない女性のかたちが登場したに過ぎないのであって、こうした批判が出てくるのは、この世の道徳を作るのが男性であり、女性に道徳を押し付けてきからと⁷⁵⁾、と鋭い指摘をしている。派手な服装をして悪目立ちしていたモダンガールの存在を否定するために、売春婦のイメージが重ね合わされたともいえよう。

既述のように1920年代当初のモダンガールは、従来の女性としての在り方に反発する姿勢として肯定的に捉えられることが多かった。しかし20年代半ばを過ぎると、次第に否定的な言及がなされるようになっていく。この時期、欧米や西洋に存在するモダンガールとは違った、日本ならではのモダンガールについて論じられることが多くなっていったのである。洋服をまとっただけの存在、つまり外側だけを西洋風に装った存在であることもあり、「所謂モダンガール」は、消費文化やエロチシズムを煽るものとさえ捉えられた。

『女性』誌上においてモダンガールを批判する発言が見られるのは、大正14年の12月号からであった。この号ではモダンガールに関する小特集が三部構成で組まれている。一つ目は安成二郎の「モダンガール突然変異論」、二つ目は下田将美の「明るい半面と暗い半面」、三つ目が原田譲二の「心身共に岐路に立つ」である。この三つの記事に共通していることは、家族や夫の支援をうけ経済的余裕を持ちながら消費生活を享受する、洋風文化にあこがれている女性を悪いモダンガールと批判しながら、良いモダンガールと対比している。モダンガールを部分的に肯定しつつも注意すべき存在として読者に知らしめようとしていた。

下田は、「明るい半面、暗い半面」で「資生堂の薔薇やダリアの会などに見入ってゐる人達、銀座の通りを絹の日傘などをさして歩いている人達」を「洋装をして、新しさうなことを口にする人達」にすぎないと批判している。同時に、このような外見だけ近代化している人間よりも、日々の労働現場に即した現実の要求から出発し、「ジミに思想の根本から色をかへやうと努力している目立たない人達」の中に「本当のモダンガール」がいるのではないかとの疑問を投げかける。外見などのうわべだけを西洋風にするのを「まねごとの上すべり」と表現しと

ている点から、それは真の「モダンガール」ではなく、近代的精神を持ち合わせない「所謂モダンガール」と呼称し否定的に見ていたことが分かる。

原田譲二は、大きくわけて2種類のモダンガールを提示している。一つは近代的な都会や「色の世界、音の世界、感覚の世界」に惹きつけられ表層的に欧米文化を模倣する「不健全」なモダンガールであり、もう一つは「精神も真の意味において、モダンで、健やかで、自由で、あたかも日光と大気を欲しいままにする向日葵のような存在」であると主張する。その上で、実際の生活が、近代化つまりモダン化している時だからこそ、モダンガールの今後を決める岐路に立っている時期であり、今の女学生達には後者のような内面的にも近代化が進んだ女性になってほしいことが示唆されていた⁷⁶⁾。ここで原田が表現する「内面的な近代化」が何を指しているのか明確ではない。しかし、アメリカ文化の流入と相まった欧米的享楽のみを享受することを、原田が否定的に見ていたことが窺える。

安成二郎は「ピアノとヴァイオリン、活動写真とラジオ」などの言葉を列挙し、欧米文化を連想させるような言葉でモダンガールを表現するところから始まっている。続いて、モダンガールを、フェミニストでも、影山英子、下田歌子、矢島楯子、平塚らいてうなどの存在とは全く異なることから、繋がる種がない存在、つまり「突然変異」を遂げた存在と解説する。またモダンガールを「変てこな脊椎動物」だ、とも述べている。モダンガールをショップガールなどの存在と分けた上で、前者は後者よりは聡明であると言及はしているが、「少し安っぽい」とも表現し、いずれは消滅する退行的変種と断じている⁷⁷⁾。このように難じた安成が考える良いモダンガールとは、健康体を兼ねそろえた「スポウツの娘」としていたのは、この三者の中では異質であった。

以上のように『女性』誌上では、モダンガールが当時流入してきた欧米の大衆文化や享楽さと部分的に結びつけられ批判の側面として指摘されるようになっていく。資本主義に基づく消費文化やエロチシズムの観点からも、モダンガールが否定されていく。友情や努力のように本来金銭に換算できないものまでを経済に巻き込み考える風潮を論難する、神近の指摘は、その典型であった⁷⁸⁾。これらの記事が批判しているモダンガールとは「所謂モダンガール」、つまり、外見だけを西欧風に着飾り、自由を楯に何をしても勝手だと考える女性であり、「真のモダンガール」とは、精神的内的な成長をした女性、つまり北澤が述べたように「経済的或いは精神的に自己が独立して、常に自己を尊重し自己を主張する若き女性」、自己管理ができる人を指していた。因みに、北澤は先述した小特集内で表

現されていた「所謂モダンガール」は「悪いモダンガール」と称し、「真のモダンガール」は「良いモダンガール」と表現している。このようにかかる小特集以降、『女性』誌上ではモダンガールに対する否定的な評価が散見されるようになる。しかし、どれも部分的にモダンガールを否定するだけで、モダンガールを完全否定する見解は見出されないことは確認しておきたい。

ところで、モダンガールの評判が落ち、負の噂が広がる契機となったのは、この小特集の冒頭に書かれているリッチ事件が関係していた。1925年9月に実際に起きた、かかる事件は以下の通りである。母親とダンス場に出入りしていた娘（深谷愛子）が母親の知り合いである、イタリア人商人のウンベルト・リッチ氏と関係を結んで金銭をだまし取ろうとろうとしたところ、口論となり、ピストルを発砲し、リッチ氏を負傷させた事件である。階級、人種、文化的な差異を飛び越えて生じたこの事件は、外交問題になりかねなかった。事件発生場所がイタリア大使館であったこと、母子でダンスに入り浸って外国人相手に遊び興じていたこと、母親は離婚していたと雖も元海軍大佐の妻であったこと、つまり、事件を起こした張本人である深谷愛子は海軍大佐令嬢にあたること、愛子が未だ16歳の少女にすぎなかったこと、などの点が重なり、その猟奇性から世間の注目を集めた⁷⁹⁾。

このリッチ事件は、モダンガールのイメージをさらに毀損することになる。この娘の断髪洋装の外見と奇抜な言動が、世間のモダンガール像に重ね合わされていったからである。先の特集の中で原田も文頭にリッチ事件に言及してから自身のモダンガール論を展開しているうえ、安成は深谷愛子を「ひどい嘘つき」の典型としている。同年10月の『婦女界』⁸⁰⁾では、「モダンガールのメンタルテスト」という調査がなされている。「現代の若き女性はどうなことを考えてゐるか？」と題されたこの記事では、冒頭から「モダンガールといへば、世間の人はずぐにリッチ事件の深谷愛子を聯想するでせう。」という一文から始まっていることから、深谷愛子のイメージがそのままモダンガール像に投影されていたことが分かる。先に挙げたアンケート調査では、質問項目に、結婚願望の有無、結婚前の男女交際のよしあし、好きな運動、好きな舞台俳優、洋装と和装のどちらを好むか、などが挙げられていることから、モダンガールの一般的なイメージが、当時良しとされた良妻賢母像とは真反対の位置に存在していたことを窺うことができる。

このようにして、モダンガールへの否定的な文章が述べられる一方で、1925年

以降もモダンガールを肯定的に述べる意見は依然として存在し続けた。片岡鐵兵はモダンガールのことを、知識的だとは言えないが、生活気分は「科学的で合理的」、と当時のウエットな人間関係から脱したモガを評価している⁸¹⁾。石川六郎は、自分の意思とは違うものを大胆に率直に「ノー」といえる女性が少ないことを長嘆しつつ、モダンガールの男を男とも思わずに、無遠慮に闊歩する姿を「讚美」している⁸²⁾。この石川の評価は、モダンガールを全面的に評価する稀有な例であった。更に特徴的なのは昭和2年5月号に掲載された「女性に與へる言葉」⁸³⁾の中で表現されたモダンガールの3通りの解釈である。一つ目は、単に女の娼婦化とみなすもの、二つ目はヤンキーガール⁸⁴⁾の模倣とみなすもの、三つ目が自由人としての女性、とみなすものの三つである。この自由人としての女性は、既述の新居格の解釈でもあり、あらゆる強制を排除するからには、モダンガールは人並以上に自身のことを自らが作った規則で律することができる自戒の人間にならなくてはならない、としていた。いずれにせよ、当時、モダンガールには、上記の三つのイメージが混在していたといえよう。

このようにモダンガール像は『女性』誌上でいろいろ語られたが、その捉え方は一様ではなく微妙な差異があり続けた。昭和3年2月号で青柳は「『モガ』と称せらるゝ新しい女の一種族が出来た。〔中略〕至って評判は芳しくない。ところが、縁あって好奇にも這の評判の悪いモガの二三に交際してみると、孰れも案外世間の評判ほどに實質の悪いものでも無いのに驚く。皆な頭腦の良いのを特徴としている。」⁸⁵⁾と自身が実際にモダンガールと触れ合った際の実体験を記録し、モダンガールの悪評を払拭しようとする記事さえ見られる。更に、モダンガールの服装はただの洋装であり、欧米に行けば下女やおばあさんがしている恰好と何一つ変わらないにもかかわらず、日本の若い女性が洋装を着だすことにだけ大騒ぎしている世間を一蹴したうえで、このような言論空間を生み出したジャーナリズムそのものを悪評の原因とし、批判している記事も見られた⁸⁶⁾。

上記のように、『女性』誌上ではモダンガールを肯定する記事は根強く存在し続けたが、従前にはなかった否定的側面の強調が時を下るに従いジャーナリズムの影響も受け、負のイメージの定着が推進されていったと考えられる。

最後に

雑誌『女性』から通してみられるモダンガールについて述べてきたが、定義が

曖昧であり、主要人物が存在しないため、厳密にはそれぞれの論者によってその言葉の使われ方は異なっていた。しかし、この幅がある定義の内でも共通項は存在しており、「良いモダンガール」(=「真のモダンガール」)とは、洋装の有無、既婚未婚に関係なく「自身の基準をもって、自己を律して生きる人間」であった。対して「悪いモダンガール」(=「所謂モダンガール」)とは、自由と勝手を履き違えた存在、または外見のみを西洋風に装う人間であった。関東大震災やリッチ事件などを経て、かかる負のイメージは強化され、時には売春婦と混合されることもあった。

こうした風潮もあるだけに真のモダンガールへの希求は、「徒に感傷的になってロマンティックな絵を描かずに、本當の意味での近代的女性——教養に於いて、理性に於いて、又独立心⁸⁷⁾を持つことであった。『女性』誌上において説かれる理想のモダンガールとは、世間からは厳しい視線を浴びながらも開かれつつあった日本社会の中で耐えぬき、自己を貫き通そうとする強い女性であった。

最後にモダンガールが、その後どのように消えていったかを、洋装をしていた人間の割合を示すデータから見てみたい。大正14年5月の銀座の調査では、女性の洋装が1%、昭和3年11月三越本店では男性の洋装61%、女性の洋装が16%(制服の女学生も含む)、昭和12年5月、東京の女性洋装25%、昭和16年の街頭調査では55%の女性が洋装をしていた⁸⁸⁾。昭和10年代から洋装が一気に増加したことが分かる。一般大衆がモダンガールの特徴をモダンな外見、つまり洋装に見出していたことを考慮すると、彼女等は次第に「モダン」でなくなっていったことが想像できる。このようにして、彼女等は大衆に紛れ、「モダンガール」という概念そのものが消えていったといえよう。

- 1) 豊田かおり「モダニズム文学にみるモダンガール」(『文化学園大学紀要人文社会科学学科研究』第22号(2014年、文化学園大学紀要、人文・社会科学研究))。
- 2) 小林きよし「モガさんの持ち物」『漫画漫文』昭和4年(伊藤るり／坂元ひろ子／タニ・E・バーロウ『モダンガールと植民地的近代—東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』〈平成22年、岩波書店〉98頁)。
- 3) 同上。
- 4) 「大塚商会 オフィスで働く女性の元祖! 「職業婦人」の歴史に迫る(前編)」[<https://mypage.otsuka-shokai.co.jp/contents/business-oyakudachi/nostalgic-office/2018/04.html>] 平成31年1月26日アクセス。
- 5) 鈴木文史朗「モダン・ガールと普選」(『女性』〈昭和2年10月号、プラトン社)。
- 6) 斎藤佳三「初夏の婦人姿概観」(『女性』〈大正15年6月号、プラトン社)。

- 7) 青木淳子「都市空間におけるモダンガール」(『語学教育研究論叢 (33)』〈平成28年大東文化大学語学教育研究所〉)。
- 8) 彼は長梧子の名前で「滯英雑記」を書いたことを、自らの著作である『近代女性の表現』(改造社、大正12年)で確認している。
- 9) 長梧子「滯英雑記」(『読賣新聞』大正12年1月11日朝刊)。
- 10) 北澤秀一『近代女性の表現』(大正12年、改造社)。
- 11) 田中栄三「帝劇女優から映画女優まで」(『女性』〈昭和2年10月号、プラトン社〉)。
- 12) 同上。
- 13) 前掲、鈴木「モダン・ガールと普選」。
- 14) 「女人國記」(『女性』〈大正11年5月号、プラトン社〉)。
- 15) 土田杏林「分析よりも総合した個性」(『女性』〈大正12年1月号、プラトン社〉)。
- 16) 小山静子「女性史上における『女性』の意義」(『コレクション・モダン都市文化21』〈ゆまに書房、平成16年〉)。
- 17) 「資生堂美容室会社概要」[<https://salon.shiseido.co.jp/company/>] 平成31年1月25日アクセス。
- 18) 「学校法人文化学園 学園の歩み」[<https://www.bunka.ac.jp/contents/history.htm>] 平成31年1月25日アクセス。
- 19) 岩見照代『時代を映す「女性像」』(平成26年、ゆまに書房)。
- 20) 『女性』大正11年6月表紙。
- 21) Shiseidou Logo [<http://e-daylight.jp/design/logo/beauty/shiseido.html>] 平成31年1月26日アクセス。
- 22) 「主婦の友社会社概要」[<https://corporate.shufunotomo.co.jp/history/24/>] 平成31年1月25日アクセス。
- 23) 「菊町陽図書館 明治～昭和少女雑誌のご紹介」[https://www.kikuyo-lib.jp/?page_id=166] 平成31年1月25日アクセス。
- 24) 小山静子「女性史における『女性』の意義」(『コレクション・モダン都市文化』〈ゆまに書房、平成24年〉)。
- 25) 植田康夫「女性雑誌がみたモダニズム」(『日本モダニズムの研究』(プレーン出版、昭和57年)。
- 26) 「現代女性の諸相」(『女性』〈大正12年1月号、プラトン社〉)。
- 27) 和田富子「生活難失業難と貞操問題」(『女性』〈大正13年1月号、プラトン社〉)。
- 28) 関東大震災を受けて各小説家が関東から関西へ移動したことが原因と考えられる。
- 29) 北澤秀一「モダン・ガール」(『女性』〈大正13年8月号、プラトン社〉)。
- 30) 千葉亀雄「婦人時評」(『女性』〈昭和3年2月号、プラトン社〉)。
- 31) 清沢洌「モダン・ガールの解剖」(『女性』〈昭和12年12月、プラトン社〉)。
- 32) 櫻井兵五郎「モダン・ガールと職業婦人」(『女性』〈昭和2年8月号、プラトン社〉)。
- 33) 同上。

- 34) 平林初之輔「文化の女性化」(『女性』〈大正15年4月号、プラトン社〉)。
- 35) 同上。
- 36) 姜華「大正期における良妻賢母理念をめぐる新たな論議：雑誌『教育時論』掲載記事を中心として」(『早稲田教育評論』〈平成16年、早稲田大学教育総合研究所〉)。
- 37) 同上。
- 38) 「映画女優の結婚観」(『女性』〈昭和2年4月、プラトン社〉)。
- 39) 舟橋雄「変わってきた女学生の頭脳」(『女性』〈大正12年1月、プラトン社〉)。
- 40) 馬場孤蝶「女性の爲めに考へて」(『女性』〈大正11年6月、大正11年〉)。
- 41) 藤井健治郎「貞操の観念並にそれの一問題」(『女性』〈大正12年7月、プラトン社〉)。
- 42) 室伏高信「新貞操論」(『女性』〈大正14年7月、プラトン社〉)。
- 43) 新居格「婦人解放問題の二局面」(『女性』〈大正12年2月号、プラトン社〉)。
- 44) 山田わか「進歩の過程としての貞操観念」(『女性』〈大正15年8月、プラトン社〉)。
- 45) 三宅やす子「訴訟に現れた男子の貞操に就いて」(『女性』〈大正15年10月、プラトン社〉)。
- 46) 編集後記(『女性』〈昭和2年9月、プラトン社〉)。
- 47) 下田将美「現代女性生活の過渡相」(『女性』〈大正15年11月、プラトン社〉)。
- 48) 久米正雄「近代生活座談会」(『文藝春秋』〈昭和3年5月、文藝春秋社〉)。
- 49) 前掲、豊田「モダニズム文学に見るモダンガール」。
- 50) 斎藤美奈子『モダンガール論』(春秋文庫、平成15年)。
- 51) 前掲、北澤「モダン・ガール」。
- 52) 同上。
- 53) 「職業婦人の廿四時」(『女性』〈大正12年6月、プラトン社〉)。
- 54) 他に職業婦人と呼ぶには少々疑問を感じさせるような女性を紹介したい。
「A子は某商會の歐文タイピストとして水色のポプリンガウンを着ることとなった。〔中略〕だが、彼女はAの次がBであることもアルファベットの終わりがZであることも知らないのだ。がそれで彼女は社長から殊の外愛されていた。〔中略〕彼女は自分がタイピストといふものだというを知らなかった。」「職業婦人 ポプリン・ガウン女子」(『女性』〈昭和2年11月、プラトン社〉)。
- 55) 三宅花團「婦人のご職業」(『女性』〈大正13年4月、プラトン社〉)。
- 56) 「男女共學の問題」(『女性』〈大正14年12月、プラトン社〉)。
- 57) 派手な洋装姿をした女性に公娼私娼は多い。
- 58) 前掲、北澤「モダン・ガール」。
- 59) 高島素之「文化過程より灌たる現代女性」(『女性』〈大正14年9月、プラトン社〉)。
- 60) 生田春月「女性に與ふる言葉」(『女性』〈昭和2年5月、プラトン社〉)。
- 61) 千葉亀雄「環境と女の力」(『女性』〈大正15年9月、プラトン社〉)。
- 62) 同上。
- 63) 同上。

- 64) 前掲、北澤「モダン・ガール」。
- 65) 同上。
- 66) 他動、能動に関しては一般的に使われる意味と異なるが、前掲の北澤「モダン・ガール」でも同様の使われ方がしていた。
- 67) 前掲、清沢「モダン・ガールの解剖」。
- 68) 前掲、北澤「モダン・ガール」。
- 69) 三宅花園「柳原樺子氏と徳川喜久子氏」(『女性』〈大正13年4月、プラトン社)では「某伯が一平民の娘を夫人として迎へられる、といふ事は先頃新聞上にも噂されて居ました。」とあるように、身分さえも乗り越えた自由恋愛について言及されている。
- 70) 関東大震災は、電気、水道、道路、鉄道等のライフラインにも甚大な被害を及ぼし、その後の経済や文化などにも影響を与え、近代化において大きな節目となった。『女性』誌上では、この震災に関する弔いの記事や、小説家が地震に対する感想を寄稿することが多く、10月からの約3か月間は、関東大震災に関する記事ばかりが掲載され、当時この地震がいかに大きなインパクトを与えていたかがよく分かる。
- 71) 山川菊枝「二重に意味を持つ婦人の失業」(『女性』〈大正13年1月、プラトン社)。
- 72) 池田鎌子「貞操に陰影を作るものは何」(『女性』〈大正13年1月、プラトン社)。
- 73) 前掲、生田「女に與へる言葉」でも記したように、実際、モダンガールは、単に女が娼婦化した存在でもであると受け取られていた。
- 74) 新妻伊都子「今様女三態」(『女性』〈大正14年1月、プラトン社)。
- 75) 前掲、清沢「モダン・ガールの解剖」。
- 76) 原田譲二「心身共に岐路に立つ」(『女性』〈大正14年12月、プラトン社)。
- 77) 安成二郎「モダンガール突然変異論」(『女性』〈大正14年12月、プラトン社)。
- 78) 神近市子「母性愛の主唱」(『女性』〈昭和2年10月、プラトン社)。
- 79) 「読賣新聞」内では、大正14年9月30日から昭和9年3月に至るまでの約9年もの間、合計23件の記事が見えたことから、この事件の衝撃の大きさ、注目度の大きさも理解できる。
- 80) 笠間千浪『〈悪女〉と〈良女〉の身体表象』(平成24年、神奈川大学人文学研究叢書29)。
- 81) 片岡鐵兵「女學生氣質」(『女性』〈昭和2年3月、プラトン社)。
- 82) 石川六郎「三つの問題」(『女性』〈昭和2年4月、プラトン社)。
- 83) 前掲、生田「女性に與へる言葉」。
- 84) 本来は北部アメリカ人を意味する俗語(Yankee)であり、口伝えで広まった言葉のため、語源とは関係なく曖昧な定義のまま使用されることが多い。ばんから⇒ハイカラと変遷し、その後「ヤンキー」という言葉が用いられるようになった。ヤンキーという言葉そのものは、明治大正期から使われており、明治37年発行の『最新正確布哇渡航案内』では、国際都市としてのハワイを紹介するくだりで黒人やプエルトリコ人、支那人や日本人、朝鮮人とならび「ヤンキーの子供」を小

ばかにした表現で紹介している。工藤泰子「日本人移民がみた戦前ハワイのイメージ」(『京都光華女子大学研究紀要50』〈平成24年、京都光華女子大学〉)。

- 85) 青柳有美「女の敵になりて」(『女性』〈昭和3年2月、プラトン社〉)。
- 86) 前掲、鈴木「モダン・ガールと普選」。
- 87) 読者投稿欄「女性の叫び」(『女性』〈昭和2年4月、プラトン社〉)。
- 88) むかしの装い [http://blog.livedoor.jp/mukashi_no/archives/35463452.html] 羽仁もと子(論文のタイトルあるはずだが)「わたしの家庭観」『婦人之友』〈昭和23年1月、婦人之友社〉(平成31年1月26日アクセス)。